

橋本侃先生と「ヘキュバのために！」

伊坂青司

今は亡き橋本先生から献本していただいた『ヘキュバのために！』（欧友社、二〇〇七年九月）が、手元にある。この本のタイトル「ヘキュバのために！」が何を意味しているのか、謎かけをされたような思いで研究室の本棚に置いたままにしてあった。改めて手にして読んでみると、そのなかには、生前に書きためられた諸論文とともに、すでに死期を予感された先生のメッセージが織り込まれている。「大病術後の五年目」から「統計的な平均数値として換算される」余命を推し量って、「これまで書き散らしたものを一冊にまとめておかないで」（三一八頁）との想いで公刊されたのであった。

生前は先生をあまりに身近に感じすぎて、そして忙しさに取り紛れて、ご著書を改めて読むことができなかった。亡くなられてから、ようやく先生の研究の足跡をたどり直すことができるようになった。しかし今となっては、直接に問いを投げかけ、本心を伺うことはできない。本書に込められた先生のメッセージを読み解くしかない。

先生は本書のなかで、ライフワークともいえるべきシェイクスピア研究の難しさを繰り返し語っておられる。

その難しさとして、四〇〇年以上も前の英語を、しかも外国人として読まなければならないこと、エリザベス朝時代のイギリスの歴史や文化に、時代と空間を越えて同化しなければならないこと、などが挙げられている。そのような難しさにもかかわらず、シェイクスピアを研究対象として選ばれた動機について、「シェイクスピアの描き出す世界が幾何級数的に複雑多岐にわたっているからこそ研究の対象になる」(一一頁)と述べられている。

シェイクスピアは先生にとって、現実の複雑多岐な世界を見るための、しかも紆余曲折の人生を歩んでゆくうえでの導き手だったのではないだろうか。難しいシェイクスピアをあえて研究対象に選ばれた本音を、人生最期の幕を引く時のことを想定して、次のように吐露しておられる。「こちらが人生の幕を閉じる時、己の一生を自分なりに清算したいと思うでしょうから、むつかしいものに最期の瞬間まで立ち向かうことで、生きていた実感を持ちたいと思うのが本音です」(一一頁)。そしてシェイクスピアに最期の最期まで付き合おうとするご自分を、「酔狂」と称されるのである。

先生のシェイクスピア研究は、単に机上に止まるものではなかった。「自ら舞台に立つか、演出した経験を持つているという自負がある」(一二頁)と書いておられることから推察して、先生は舞台芸術としての演劇に密接にかかわってこられたのであろう。そのような自負ゆえにこそ、本書のなかで、近年の演劇ブームについて辛口の批評をされ、ブームに流されることのない舞台芸術の正道に想いを馳せておられるのである。

先生の演劇への想いは、日本の伝統芸能へと遡ってゆく。具体的には、記紀の時代から伝わる「日本古代の祭祀」としての「神楽」、死者の霊を迎えて演じられる「能楽」などが、考察の対象となっている。神楽や能

楽の演者に共通する特徴として、「日常性とは隔絶した、何か別の存在に化けること」（三〇頁）が指摘される。そして「化けていながら、化けてはいないという逆説的な境地」が、演者の理想とされている。別な存在に化けながら、化けていることを感じさせないことが、演者の力量だというわけである。このような理想こそ、先生の演劇論の核心をなすとともに、シェイクスピア演劇にも通底するものであろう。そしてまたこれは、先生の人生を貫く理想ではなかっただろうか。

おそらく最後に書かれたであろう「はじめに」のなかで、本書のタイトル「ヘキュバのために！」を選んだ意図が語られている。ハムレットが旅芸人に芝居を演じさせる場面で、役者は「トロイのプライアムの王妃ヘキュバの悲運」を語りながら、その目から「役になりきって本物の涙が流れ落ちた」（三頁）。その「全身全霊を懸ける」役者にハムレットが叫んだ言葉が、「ヘキュバのために！」だったのである。つまりこの言葉は、芝居という絵空事に全身全霊を懸ける役者へのハムレットの賛辞である。そしてこれに続く「人生は芝居である」という先生の言葉と合わせてみると、「ヘキュバのために！」という言葉には、人生という芝居を全身全霊で演じようとする先生の真剣な心意気が込められていると解釈することができる。

先生とは学科が違っていたこともあって、日常の場で話をする機会もそう多くはなかった。それでも、人文学会の懇親会の時などは、必ずといっていいほど先生の方から声を掛けていただき、飲みながら親しくお話をさせていただいた。一度だけ、野毛界限のしもた屋風の飲み屋に二人連れ立って行ったことがあった。何を話題にしたか記憶が定かではないが、話し合っていたその時のまなざしは、いつものようにいたずらっぽくありながら、その奥に人間としての真面目さと優しさが秘められていた。

先生は闘病生活のなかでも、学生への、とりわけゼミ生への指導を最後まで貫かれた。痩せ細ったお体で学年末の成績評価を事務の窓口まで持ってこられ、また病床から卒業論文集の指導にあたられたとも聞く。名誉教授の称号は、先生の研究と教育双方の実績に相応しいものであろう。名誉教授称号授与式（二〇〇九年四月六日）には、亡くなったご本人に代わって奥様にご臨席いただいた。その折りに奥様から、最後の号になる橋本ゼミの卒業論文集を見せていただいた。その表紙には、紛れもなくあの「ヘキュバのために！」が刻印されていた。

告別ミサの時に棺のなかに静かに横たわった先生のお顔は、実に毅然としたものであった。人生という芝居の舞台から降りられた先生の真顔に、ようやく出会えた想いがした。ゼミ生や卒業生の流す涙は、先生を天国へと送るかけがえのないものであった。いつかあの世で再会できることがあれば、またあのいたずらっぽい、そして優しいまなざしで迎えてくれるに違いない。その時まで、さようなら。